群馬大学社会情報学部研究論集　第13巻　29—49頁　2006

ジェイムズ・ジョイスの「痛ましい事故」

南　谷　覺　正
外国文化第一研究室

A Reading of "A Painful Case" by James Joyce

Akimasa MINAMITANI
World Civilizations

Abstract

This essay is an attempt to explicate in detail "A Painful Case," the eleventh story in James Joyce's *Dubliners*. The analysis focuses on the psychological and pathological complexities of protagonist James Duffy, introducing the perspective of what Joyce calls "epiphany" to clarify the theme of the story.

「痛ましい事故」は，『ダブリンの人々』11番目の，「成熟期」の作品群では最後（４番目）の作品である。執筆は1905年で，1906年になってかなり書き直されている。

*　　*　　*　　*　　*

ダブリン市民であるジェイムズ・ダフィー氏は，チャペリゾッドに住んでいた。それは，ダブリンの中心からなるべく遠く離れて住みたいからであり，またチャペリゾッド以外の郊外は，すべて卑俗，当世風，虚飾を感じさせるからである。彼が住んでいるのは古い黒ずんだ家で，窓からは廃業した蒸留所と，ダブリンの基であるリフィー川の浅瀬が見渡せた。絨毯の敷いてない部屋の高い壁には１枚の絵も掛かっていない。鉄枠の寝台，鉄の洗面台，４脚の籐椅子，衣服掛け，石炭入れ，炉囲い，鉄製の炉用具，真四角のテーブル，その上に載せられた手文庫といった家具類は，一つ一つ彼が買い求めたものだ。アルコーブには白木の棚がしつらえられて書棚とされ，白いカバーで被れたベッドの足元には黒と真紅のラグが掛けられている。洗面台の上には小さな手鏡が吊され，日中は白いシェードのランプがマントルピースの唯一の飾りとなっていた。白木の書棚には，本がその嵩の順に，下から

整然と並べられ，一番下の棚の端にはワーズワース全集が，一番上の棚の端には，手帳用の布表紙でくるんだメイヌースの教義問答集が立っていた。手文庫の上には筆記用具がいつも置かれてあった。手文庫の中には，ハウプトマンの『ミヒャエル・クラマー』の翻訳手稿が入れてあり，そのト書きの部分は紫色のインクで書いてあった。また小さな紙の束が真鍮のピンで束ねてあり，そこに時おり一つの文が記された。ある皮肉な気分の時に，気散じ薬の広告が一番上の紙に糊づけされた。手文庫の蓋を開けると微かな香りが匂った。ある時は鉛筆の杉材の香りが，ある時は壜入りの糊の香り，またある時は――置き忘れられたのであろう――熟れすぎた林檎の香りが漂い出てきた。

ダフィー氏は，物理的ないし精神的な無秩序を示すものは，どんなものであれ厭悪した。中世の医者なら彼を鬱気質と判じたことであろう。これまで経てきたすべての歳月が刻み込まれている彼の顔は，ダブリンの通りの色である褐色を帯びていた。縦長の大きめの頭には乾いた黒い髪が生え，愛想のない唇の上には黄褐色の口髭が，完全には覆いかぶさることなく生えていた。彼の頬骨も表情に厳しさを添えていた。しかしその目に厳しさはなく，黄褐色の眉の下から世界を見つめ，他人の贖罪の本能にはいつでも応じる用意があるのに，しばしば失望させられている人間といった印象を与えていた。彼は自分の行為を疑わしげに横目で眺めながら，自分の体から少し離れて生きていた。奇妙な自伝的性癖があり，時おり心の中で，自分自身について，主語が三人称で述語が過去形の短い文を組み立てることがあった。乞食にはけっして施しをせず，頑丈な榛(はしばみ)のステッキを手に，しっかりとした足取りで歩いた。

彼は長年，バッゴット・ストリートの私設銀行で出納係をしていた。毎朝，チャペリゾッドから路面電車で通勤した。昼にはダン・バークの店に行き，ラガー・ビールとアロールート・ビスケットの小皿の昼食を取った。4時に仕事から解放されると，ジョージズ・ストリートの店に行って夕食を取った。そこはダブリンのけばけばしい若者たちに煩わされる心配がなく，また料金体系にも一定の実直さが認められたからだ。宵は下宿の女主人のピアノの前か，ダブリン市街の周縁部を歩き回るかして過ごされた。彼はモーツアルトの音楽を好み，時おりオペラやコンサートに出向いた。それが唯一の道楽といったような具合だった。

彼は友人も話し相手も持たなかった。教会にも行かないし，どの教派にも属さなかった。彼の精神生活は，他人とのいかなる精神的交流もなく営まれた。クリスマスには親戚を訪れ，彼らが死ぬと墓地へ送っていった。彼はこの二つの社会的義務を体面のために行ったが，市民生活を律する様々の因習についてはそれ以上の譲歩はしなかった。ある状況に至れば，銀行の金を奪うことも辞さないと考えることはあったが，そういう状況は一度も訪れず，彼の人生は冒険的なこととは無縁に，坦々と流れていった。

ある晩のことロータンダで，気がつくと，二人の女性の坐っている席に隣り合わせて坐っていた。その日聴衆はまばらで，ホールはしんとしており，コンサートは痛々しいほどの失敗の予兆があった。隣りの婦人が一度か二度ホールを見渡して言った。

――こんなにお客が少なくて本当にお気の毒ですわ。空席を前にして歌うのはどんなにか辛いこと

でしょうね。

この言葉を会話への誘いと取ったダフィー氏は，彼女が物怖じせず自然に振舞うのに驚いた。会話の間に，彼は彼女を永遠に記憶に留めようとした。彼女の隣に座っているのが娘であることを聞くと，彼女は自分より１歳かそこら年下であると判断した。彼女の楕円形の顔は，かつては美しかったに違いなく，知的な趣きをまだ残していた。輪郭のくっきりした目鼻立ちで，その濃い青色の目は落ち着きを湛えていた。それは最初挑戦的なまなざしを打ち出し，やがて混乱すると，気乗りのした喪心とでもいうような感じで瞳が虹彩に溶解し，一瞬深い感受性を持った気質をのぞかせる。しかし瞳はすぐに自らを立て直し，半ば露になった本性も，再びつつましさの統御に服するのであった。そして彼女のアストラカンの上着は，かなりの起伏を持った胸を包みつつ，挑戦的な趣きをさらに強めるのであった。

それから数週間後，彼はアールズフォート・テラスのコンサートで再び彼女に出会い，娘の注意がよそに行っている間のわずかな時間に，彼女のことを個人的に知るようになった。彼女は自分の夫のことに一度か二度言及したが，その言葉の調子には，彼に対する警告の意図はなさそうだった。彼女の名前はシニコウ夫人で，夫の曾々祖父はイタリアのレグホーンの出身ということであった。夫はダブリンとオランダの間を往復する商船の船長をしており，彼女との間に子供は一人であった。

彼女と偶然三度目に出会ったとき，彼は思い切って二人で会うことを申し込んだ。彼女は来た。そしてそれを皮切りに何度も会うようになった。彼らはいつも晩に会い，最も静かな散歩道を選んだ。しかしダフィー氏は，こうしたやり方は性に合わず，こっそり会うことを余儀なくされるのを見ると，彼女に強いて彼をシニコウ家に呼ばせた。シニコウ船長は彼の娘の手が求められているのかと思い，ダフィー氏の訪問を奨励した。シニコウ船長は妻を快楽のギャラリーから心底追放してしまっていたので，誰かが彼女に関心を持とうなどとは思ってもみなかったのだ。彼は家に不在がちで，また娘も音楽の家庭教師でよく外に出ていたので，ダフィー氏は夫人と二人きりの機会を多く持った。二人ともこのような冒険は初めてのことであったが，別段不自然には感じなかった。少しずつ彼は自分の思考を彼女の思考に絡ませていった。彼女に本を貸し，様々な思想を彼女に吹きこみ，彼の知的生活を彼女と分かち合った。彼女は彼の話すすべてに耳を傾けた。

彼の理論に対して，彼女は時おり自分自身の人生から得た事実を提出した。そしてほとんど母親のような懇情を以て，彼のすべてを出すよう促した。彼女が彼の告解司祭であった。彼は，アイルランド社会党の集会でしばらく手伝いをしていた体験を語った。20人ほどの生真面目な労働者たちが，おぼつかないランプに照らされた屋根裏部屋に集まり，その中に毛色の違う彼が交じっていたのだった。しかし党が三つに分裂し，それぞれが別の指導者のもとに，別々の屋根裏部屋に集まるようになると，彼は集会への出席を絶った。労働者たちの議論は，あまりに小心翼々としており，一方賃金の問題になると度外れの関心を寄せる。彼らは一片の柔らかさもない現実主義者であって，彼らの手の及ばない閑暇の産物であるところの，思考の正確さに対し瞋恚を懐いている。ダブリンでは社会革命などここ数世紀は無理でしょうね，と彼は夫人に言った。

夫人は，彼の思想を著作にしてはどうかと勧めた。何のためにでしょうか，と彼は見下すような表情を注意深く浮かべて聞き返した。60秒も続けて思考することができない売文業者たちと競うためでしょうか？モラルは警察に，芸術は興業者にお任せの，鈍感な中産階級の批評に自分を曝すためにでしょうか？

彼はダブリン郊外にある彼女の小さな家を足繁く訪れた。しばしば彼らは二人だけで晩を過ごした。少しずつ，互いの考えが絡み合ってくるにつれ，彼らはより親密なことを話すようになっていった。彼にとって彼女の存在は，外来植物を暖かく包む土のようであった。彼女は何度となく，ランプを灯さぬまま，暗がりが二人を包むにまかせた。暗い慎ましやかな二人きりの部屋，そして耳の奥でまだ余韻を響かせている一緒に聞いてきた音楽が彼らを結びつけた。この結合は彼に歓びをもたらし，彼の性格の角ばったところを和らげ，彼の精神生活に感情の潤いを与えた。彼は時々自分の話している声の響きに耳を傾け，彼女の目に天使のような高みに昇っているであろう自分の姿を想った。そして彼は，彼女の熱情的な性質をさらに彼に引き寄せるにつれ，非人称的な声（彼はそれが彼自身の声だと認知した）が，魂の癒しがたい孤独を説いているのを聞いた。われわれは自分自身を与えることはできない，われわれは自分自身でしかないのです，とその声は言った。こうした対話の終わりは，ある晩，シニコウ夫人が，いつにもない興奮の兆候を示していた時に訪れた。夫人が情熱を籠めて彼の手を取り，それを彼女の頬に押しつけたのだった。

ダフィー氏は驚愕し，彼の言葉を彼女がそのように解釈することに幻滅を感じた。彼は1週間彼女の家への訪問を絶った。それから彼女に会うことを求める手紙を書いた。そしてこの最後の会見が，二人の破綻した告解室の影響に煩わされるのを避けるために，パークゲイトの近くのケーキショップで会うことにした。寒い秋の日だった。その寒さにもかかわらず，彼らは公園の中の道を3時間近くあちらこちらと歩き回った。そして二人は交渉を絶つことに同意した。すべての絆は――と彼は言った――悲しみへの絆です。公園を出ると二人は電車乗り場のほうに向かって歩いた。しかしその時彼女が身体をひどく震わせ始めたので，彼はすばやく彼女に別れを告げて立ち去った。数日後，彼が貸した本と楽譜の入った小包が届いた。

4年が過ぎた。ダフィー氏は彼の坦々とした生活に戻っていた。彼の部屋はあいかわらず彼の精神の秩序を表していた。階下のピアノの楽譜台には幾つかの新しい楽譜が載せられ，彼の書棚にはニーチェの『ツアラツストラかく語りき』と『悦ばしき知識』の2冊が立っていた。手文庫の紙束にはめったに書き込まれることがなかった。最後の会見から2ヶ月後に書かれた文章の一つは次のようであった――男と男の間には性の交わりの不可能ゆえに愛は成立せず，男と女の間には性の交わりの不可欠ゆえに友情は成立せず。彼は，彼女に会わないよう，コンサートにも行かなくなった。彼の父親が死に，銀行の副頭取が退職した。しかし彼は少しも変わることなく，毎朝電車で市内に通い，毎夕ジョージズ・ストリートで適度な夕食を取り，デザート替わりの夕刊を読んでから，歩いて家に帰った。

ある夕方，彼がコーンビーフとキャベツの料理を口に入れようとしたところで，彼の手がはたと止まった。彼の目は，水注（ピッチャー）しに立てかけて読んでいた夕刊のとある記事に釘づけになった。彼は料理を

皿に戻し，記事を注意深く読み始めた。それから彼はコップ１杯の水を飲み，皿を脇に押しやり，新聞紙を二つに折り畳んで両肘の間に抱え込むようにして，その記事を何度も何度も読み返した。キャベツが，皿に冷たい白い脂を凝固させた。店の娘がやって来て，料理に火がよく通っていなかったのかと聞いた。彼はとてもよく調理されていると答え，無理をして２，３口食べた。それから彼は料金を支払って外に出た。

11月の夕暮れの薄明りの中を，頑丈な榛のステッキを地面に規則正しく突きながら彼は足速に歩いた。彼のぴったりしたダブルのコートのポケットから，黄色味を帯びたメイル紙の端が覗いていた。パークゲイトからチャペリゾッドに行く寂しい道に入ると，彼は歩調を緩めた。ステッキの地面を叩く音の勢いが弱まった。彼の吐く息は，ほとんど溜息のような音となって不規則に出され，冬の空気の中で白く凝結した。家に着くと彼はすぐに寝室に上がり，ポケットから新聞を取り出し，衰えつつある窓明りの下でもう一度記事を読んだ。彼は声に出しては読まなかったが，神父が祈りを密誦するときのように，唇を動かしながら読んだ。

シドニー・パレイド駅で婦人が死亡
痛ましい事故

本日ダブリン市立病院において，（レヴェット氏不在につき）検死官代理が，昨晩シドニー・パレイド駅で死亡したエミリー・シニコウ夫人（43）の検死を実施した。夫人は線路を横断しようとして，22時のキングズタウン発鈍行列車にはねられ，頭部と右体側に損傷を受け死亡したものと確定された。

当該鉄道会社に勤続15年の，列車の運転手ジェイムズ・レノンは，安全確認係の笛を聞いて列車を発進させたところ，その１，２秒後に大きな叫び声を聞き，列車を停止させた。列車の走行速度は緩やかなものであったと言う。

当駅のポーター，P. ダンは，列車が発車しようとしたとき，一人の婦人が線路を横断しようとしているのを発見，彼女の方に駆け寄りながら叫んだが間に合わず，彼女は列車の排障器に捉えられ地面に打ち倒されたと供述した。

陪審員：あなたは婦人が地面に倒れるところを見たのですか？

証人：はい，見ました。

警察の巡査部長クローリーは，現場に到着したときには婦人はプラットフォームに横たえられすでに絶命しているように見えたと証言した。その後遺体を待合室に移動させ，救急車の到着を待った。

巡査57Eは，この証言に誤りはないことを認めた。

ダブリン市立病院の副外科医をしているハルピン医師は，肋骨の下２本が骨折しており，右肩に重度の打撲傷が認められたと供述した。また頭部右側面に転倒による損傷が認められた。これらの傷害は通常は生命に関わるものではなく，当医師の意見では，ショックによる突然の心停止が死因と判断されるとのことである。

H. B. パターソン・フィンリーは，鉄道会社を代表し，本件に関し深甚なる遺憾の意を表明した。当

鉄道会社は，歩道橋による以外の線路の横断をしないよう各駅に注意書きを掲示し，また地上での踏切りには特許つきの開閉機を設置するなど，あらゆる事故防止措置を講じてきた。死亡した婦人は，夜遅くプラットフォームからプラットフォームへと渡ることがよくあり，その他の状況も考慮すると，鉄道会社の社員に落度があったとは認められないと言う。

死亡した婦人の夫である，シドニー・パレイド，レオヴィルのシニコウ船長もまた供述した。死亡したのは彼の妻に相違なく，事故当時彼はダブリンにおらず，今朝方ロッテルダムから帰ってきたばかりである。彼と死亡した婦人とは結婚して22年になり，ずっと幸福に暮らしていたが，2年ほど前から妻に幾分節制上の問題が出てきたと話した。

メアリー・シニコウ嬢は，最近母親が夜遅く酒を買いに家を出るようになったので止めるようしばしば説得を試み，禁酒連盟に参加するよう勧めたという。彼女（証人）は，事故の1時間後に帰宅している。

陪審員団は，医学的証拠に基づいて判決を下し，レノンに責任はないことを確定した。

検死官代理は，本件はたいへん痛ましい事故であるとし，シニコウ船長とメアリー嬢に深い弔意を表明した。そして，当鉄道会社に将来類似の事故が発生する可能性を防止する強力な措置を講じるよう督励した。以上のような経緯で，本件の有責者はなしという判決が出され，結審となった。

ダフィー氏は新聞紙から目を上げ，窓の外の生気のない夕暮れの風景を眺めた。川は，空虚な蒸留所の側に横たわり，時おりルーカン・ロードの家に灯りが点った。何という結末だろう！彼女の死を語る記事全体が彼に吐き気を催させた。自分が神聖に思っていたことを少しでも彼女に語ったことを考えると胸が悪くなった。擦り切れた文句，空疎な同情の言葉，ありふれた俗悪な死の詳細を隠すよう言い含められた記者の用心深い言い回しが胃をむかつかせた。彼女は彼女自身を貶めただけではない，彼をも貶めたのだ。彼は，彼女が辿った，惨めで悪臭のする汚らしい悪徳の生活を思い浮かべた。あれが自分の魂の伴侶とは！彼は，かつて見たことのある，瓶や缶をぶらさげて酒場の主人に酒を物乞いしているよぼよぼ歩きの人間たちの姿を思い浮かべた。何という結末だろう！明らかに彼女は生きるに相応しくない人間であったのだ。生きる目的の力を欠いた人間，やすやすと悪習の餌食となってしまう人間，文明の下積みとなった敗残者の群れの一人だったのだ。それにしても彼女がそんなに低い奈落にまで身を落としてしまうとは！自分が彼女という人間について，こんなにまで誤った判断をしてしまうなどということがどうして起こり得たのだろう。彼は例の晩の，彼女の感情の激発を思い出し，それについてこれまで以上に厳しい解釈を下した。そして彼の選んだ行為を正当なものだとするのに何の困難も感じなかった。

夜の帷がおり，思い出がさ迷いはじめると，彼は彼女の手が彼の手に触れるのを感じた。最初胃を襲った衝撃は，今は彼の神経を襲っていた。彼はすばやくコートを着，帽子をかぶって外に出た。玄関の敷居のところで冷気が彼に触れ，袖口からコートの中へと入り込んできた。彼はチャペリゾッド橋のたもとのパブまで来ると，店に入ってホット・パンチを注文した。

店の主人は彼にうやうやしく給仕したが話しかけようとはしなかった。店には5,6人の労働者がいて，キルデア郡の某紳士の地所の価格について話していた。彼らは時おり，巨大な1パイント入りのジョッキから飲み，煙草をふかし，床に頻繁に唾を吐き，時々重い長靴を履いた足で，吐いた唾の上におが屑を掻き寄せていた。ダフィー氏は丸椅子に座って，彼らを見るでもなく話を聞くでもなく，ただそちらを凝視していた。しばらくすると彼らは出て行き，彼はホット・パンチをもう1杯注文した。彼はその1杯を長い時間をかけて飲んだ。店はとても静かだった。店主はカウンターに上半身をもたせかけてヘラルド紙を読みながら欠伸をしていた。外の寂しい道を，時おり路面電車がゴーっという音を立てながら通り過ぎていった。

そこに座って，彼女と過ごした時間を思い起こし，彼女について懐いている二つのイメージを交互に呼び出しているうちに，彼は彼女が死んでしまったこと，もうこの世には存在せず一つの記憶になってしまっていることを理解した。彼は何となく落ち着かない気持ちになってきた。いったい他にどうしようがあっただろう，と彼は自問した。彼女と欺瞞的な喜劇を続けるわけにはいかなかったし，かといって彼女と公然と同棲するわけにもいかなかっただろう。彼は最善と思われることをしたのだ。彼が悪いなどとどうして言えるだろう。こうして彼女がいなくなってみると，彼は彼女があの部屋に毎晩毎晩一人でいて，どんなに孤独だったかが分かるような気がした。彼の人生も，彼がいつか死ぬまでずっと孤独なものであることだろう。彼も彼女と同じように，やがてこの世に存在しなくなり，一つの記憶に過ぎなくなるのだ——思い出してくれる人がいればの話だが。

彼が店を出たのは9時過ぎでだった。暗く陰鬱な夜であった。彼は公園の最初の入り口で中に入り，黒々と聳える樹々の下を通りながら，二人が4年前に歩いた淋しい小徑を歩いた。暗闇の中で彼女が近くにいるように感じられた。時おり彼女の声が彼の耳に触れるようだった。なぜ彼は彼女に生を与えなかったのか。なぜ彼は彼女に死の判決を下したのか。彼は自分のモラルの背骨が粉々に打ち砕かれるように感じた。

マガジン・ヒルの頂きに着いたとき，彼は足を止め，ダブリンの方向に向かって流れている川を眺めた。ダブリンは灯火で赤く輝いており，冷たい夜の中で暖かく人を迎えているように見えた。斜面の下の方を眺めると，底の壁際のあたりに幾組みかの人影が横たわっているのが見えた。金で購われたこうした密かな媾卑は，彼を絶望で満たした。彼は彼の人生の方正さに歯噛みしたいような気持ちになった。自分が人生の饗宴から追放されている人間であるように感じた。一人の人間が彼を愛したと思われたが，彼は彼女に生と幸福を与えることを拒んだ。彼は彼女に恥辱の生と汚辱の死を宣告したのだ。彼は下の方にいる者たちがこちらを見つめ，早く立ち去ってほしいと思っていることが分かっていた。誰も彼を望んでいないのだ。彼は人生の饗宴から追放されている。彼は目を，灰色に輝きながらダブリンの中心へとうねり流れていく川の方に向けた。貨物列車が，川の向こう側のキングズブリッジ駅から身をくねらせながら出てきて，燃える頭を持った蚯蚓(むし)のように，執拗に，あくせくと，闇の中をうねり進んでいるのが見えた。それはゆっくりと視界から消えていった。しかし彼の耳には相変らず，シニコウ夫人の名前の音節を反復する，列車のあくせくとした鈍い響きが聞こえていた。

彼はさきほど来た徑を引き返し始めた。列車の響きのリズムが耳の中で脈打っていた。彼は記憶が彼に告げるものを疑い始めた。彼は一本の樹の下で立ち止まり，耳の中のリズムが鳴り止むのを待った。もう彼女がそばにいるようにも感じなかったし，また彼女の声が彼の耳に触れるようにも感じなかった。彼は耳を澄ましながら数分間待った。何も聞こえなかった。夜は完全に静かであった。彼はもう一度耳を澄ませた。完全な静寂。彼は彼が一人きりであるのを感じた。(1)

*　　*　　*　　*　　*

ジョイス自身は「痛ましい事故」を，「レースの後で」とともに「最悪の二作品」として考えていたということがよく指摘される。しかし典拠となっているジョイスのスタニスラウス宛の手紙を読むと，それがダブリンの事情が作品に正確に写されているかどうかの視点からの評価であることが分かる。(2) シドニー・パレイド駅で事故があった場合，担ぎ込まれる病院はダブリン市立病院であるかどうか，スタニスラウスに確認していることにも窺えるように，ジョイスは，作品と土地が常に有機的な関係を保つよう，細心の，偏執病的と言いたくなるほどの配慮を払っていたため，「痛ましい事故」では，まだ意に沿わぬものが多く残ったということであろう。それにも拘らず，物語自体としての「痛ましい事故」の完成度は高く，人気のある作品の一つとなっている。

ダフィー氏の住むチャペリゾッドは，「トリスタンとイゾルデ伝説」のイゾルデのチャペルがあった場所という因縁を有する。実際，この物語を読んで感じる poignancy は，「トリスタンとイゾルデ伝説」のそれと親縁性を持つかに見える。イゾルデがマルク王という夫を持ちながら，トリスタンと実り得ぬ宿命の恋に落ち，最後には悲嘆の死を迎えるという悲劇の感興は，20世紀のダブリンの「痛ましい事故」にも感得することができる。

「成熟期」の4作品——①「小さな雲」②「対応」③「土」④「痛ましい事故」——を俯瞰すると，①と②が，主人公の設定と，既婚男性の家庭の寂寞を描いている点で共通しているように，③と④も，結婚に見放されている主人公という設定で類似しており，また結末部の深い孤独ということでも，好一対となっている。①～④を通じて，われわれは20世紀の都市に生きる成年男女の，阻害された生と意識の解剖図を見ることができる。その意味で，「痛ましい事故」は，その掉尾を飾るにふさわしい深みを備えた作品となっている。

「痛ましい事故」の物語は，米本義孝氏の的確な区分を借用すると，(3) 主人公ダフィー氏の居室を描きながら彼の人となりを説明する「起」，シニコウ夫人との出会いから別れに至る「承」，4年後のとある日，彼女が死亡したという記事を読む「転」，その後のダフィー氏の反応を辿った「結」というふうに，整然とした構成を持っている。(4) 初読の際には，ほとんどの読者は，ダフィー氏の自己中心的で一方的な訣別によって悲惨な死に追いやられたシニコウ夫人の哀れさと，彼女が死んで初めてダフィー氏がしみじみと悟る孤独のペーソスに忘れがたい印象を受けることであろう。

シニコウ夫人がダフィー氏に出会ったとき（死亡時に43歳と新聞にあることから逆算して）39歳程度であり，ダフィー氏は，その時彼女より1歳かそこら年上であろうと推測していることから，「起」

「承」の部分でのダフィー氏の年齢は40歳見当，「転」「結」の部分では44歳前後と想定して，それほど外れてはいないであろう。ダフィー氏は，シニコウ夫人との一件を除けば，まるで色恋とは無縁のようで，「土」のマライアが，深層での意図はどうであれ，表面上は結婚願望なるものを年齢不相応にも保っているのに対し，ダフィー氏のほうは，もうずいぶん前に，独身であることを当然のこととして受け入れてしまっているように見える。銀行の出納係として，毎日判で押したように，チャペリゾッドの「脱俗」の住居から電車で通勤し，同じ店で同じメニューの昼食を取り，同じ時刻に退社し，同じ店で夕食を注文し，デザート代わりに新聞を読み，徒歩で帰宅し，ピアノを弾くか散策をして夕べを過ごし，時おりコンサートに出かける——これがダフィー氏の永遠に反復する生活であり，そしてそれに対し，彼自身何らの痛痒も感じていないが如くである。友人も話し相手も持たず，唯一の人づきあいは，クリスマスの親戚訪問と親戚の葬儀出席だけである。それすらも，おそらくは愛想や笑顔といったようなものとは無縁に，坦々となされるのであろう。

彼の居室は，鉄製の寝台，鉄製の洗面台，むきだしの床と壁というふうに，ほとんど僧院のそれを思わせる。テーブルの上に "double desk" という木箱を載せているのは，テーブルに机の機能を兼ねさせているのである。同様に，マントルピースの上のたった一つの置物であるランプは，夜読書をするときにはテーブルに降ろし，実用に供するのであろう。彼の昼食はいつも "a bottle of lager beer and a small trayful of arrowroot biscuits" と，"meager" で，夕食に行く店も，"a certain plain honesty in the bill of fare" があるからそこを選んだのであり，またデザート代わりに新聞を読むなど，生活から無駄という無駄がそぎ落とされている感がある。乞食に施しをしたことは一度もないし，夕方の過ごし方は，下宿の女主人のピアノを弾くか散策だから，これも金はびた１文かからない——ということで，ダフィー氏の生活は，絵に描いたような節倹生活である。

ダフィー氏が，「土」のマライアと大きく違うのは，マライアが知的発達の遅れている女性を想像させるのに対し，ダフィー氏は，ハウプトマンの *Michael Kramer* を自分で翻訳していることなどを見ても，本人も自認しているように，かなり知的であることだ。シニコウ夫人がダフィー氏に彼の思想を著書にして出版することを勧めると，「60秒も続けて思考することができない売文業者たち」や「モラルは警察に，芸術は興業者にお任せの，鈍感な中産階級」など相手にしたくもないと，傲然と答えているあたり，その知的自尊心の強さは，『ダブリンの人々』の登場人物の中でも屈指である。文学趣味は「小さな雲」の Little Chandler にも見られ，Chandler も隠れた自負心を持っていたが，自信のないところも多分にあった。それに比べると，ダフィー氏の自信は鉄のように堅固である。ただし，その書棚の本や彼の書き記す文章を見ると，果たしてその自信に見合うだけの内実があるかどうか，読者は躊躇せざるを得まい。むしろ閉鎖的な人格にありがちな，夜郎自大的な印象が強い。例えば，"[His eyes] gave the impression of a man ever alert to greet a redeeming instinct in others but often disappointed." というところなどには，彼の優越感が戯画的に描かれていて，読者は失笑を禁じ得ないのではなかろうか。

知的自尊心は，強い自意識を伴う。Little Chandler にも自意識の「麻痺」が感得できるが，ダフィー

氏のそれは，さらに念が入っており，自分でも半ば認め活用（？）している自意識である。「彼は自分の行為を疑わしげに横目で眺めながら，自分の体から少し離れて生きていた。奇妙な自伝的性癖があり，時おり心の中で，自分自身について，主語が三人称で述語が過去形の短い文を組み立てることがあった。」という箇所は，語り手の揶揄が幾分交えて書かれているようでもあるが，半分はダフィー氏自身の意識と見える。そしてこの性癖のために，narrative に常にダフィー氏の自意識が粘着しているのではないかと疑わねばならぬ用心が必要になるのである。例えば，新聞でシニコウ夫人の死を知ったときの，"... as he was about to put a morsel of corned beef and cabbage into his mouth his hand stopped." という，普通の人であれば忘我状態になる瞬間の行為ですら，ダフィー氏には，衝撃を受けた主人公としての行為として意識されているのではないかと感じられなくもない。《演技性》が宿痾のようについて回るのだ。

他人との内的交渉を絶ち自分に引き籠もった生活を送ると，自己の神格化が往々にして生じる。シニコウ夫人に，彼が "sacred" だと思っている思想を吐露するとき，彼は

> He thought that in her eyes he would ascend to an angelical stature, and as he attached the fervent nature of his companion more and more closely to him he heard the strange impersonal voice which he recognised as his own insisting on the soul's incurable loneliness.

と，自分を天使の高みにあるように，また自分の声が自分からではなく，どこか「非人称」的な次元から響いてきているかのように想像している。この場合は「語り手」の irony の方が強く表面に出ているようだが，これもダフィー氏の意識をなぞったものだとすると，極めて込み入った滑稽さが醸されていることになろう。"His face, which carried the entire tale of his years, was of the brown tint of Dublin streets." という文などは，前半は主にダフィー氏自身の意識，後半は「語り手」の意識で書かれているようで，irony はより精妙になっている。続く，"On his long and rather large head grew dry black hair, and a tawny moustache did not quite cover an unamiable mouth." という文では，"unamiable mouth" というのは，「語り手」とダフィー氏に共有された意識かもしれず，そうなると，普通なら髭で覆い隠したほうが見栄えがよくなるのであろう「愛想のない唇」を，ダフィー氏はそうした誤魔化しを潔しとしないため，故意に覆い隠さず一部覗かせており，そうした自分の誠実を，少し誇らしく思っているという彼の意識が写し出されていることになる。(誠実にするのなら，最初から全部見せればいいようなものだが…)

ダフィー氏という人間を分析していると，もう一つ目につくのが，その周到さの綻び，および，自家撞着である。彼自身は，自分及び自分の生活を完璧に点検して，ソツのないように生きているつもりであろうが，読者から冷静に見ると，ポカがあったり，思考（文）そのものに矛盾が絡まっていて，それが彼ご自慢の自意識の細かい網目にぽっかり開いた間抜けな穴のように見えるのである。部屋の調度についても，飾り気を排した白と黒が基調の渋い色合いの中に，ラグの "scarlet" が何とも不調

和に闖入しており，それが彼の内面の，頭隠して尻隠さずの洒落気を暴露している。(『ミヒャエル・クラマー』の翻訳の紫色のト書きもそうである。) 無駄は一切省かれているように見えながら籐椅子は4脚もある。教会，宗教に距離を保っているというにしては，書棚には *Maynooth Catechism* が，手間をかけた装丁で最上段に置かれている。

彼は，自分の頬骨は表情に厳しさを添えているが，目は優しさや柔らかさを湛えている，と自認しているようだ。(それは，*Maynooth Catechism* がワーズワース全集でバランスを保たれているという self-complacency と呼応しているのかもしれない。) テーブルの上に載せられた double desk の蓋を開けると，中に入れておいたものの匂いが香ることがあり，時に，入れたことを忘れてしまったリンゴの匂いが漂い出ることもある，と彼は言う。そう言うとき，彼はそうしたポカを演じてしまう自分を，微笑をもって眺めているらしく見える。真鍮のピンで留めた紙束は，時々文をしたためるためのもので，それは，人生の鬱——彼は "saturnine" という (ちょっと勿体ぶった) 自己分析をしている——が溜まりすぎたとき，文章にして発散させる装置になっているのだが，ある "ironical moment" に，*Bile Beans* という気散じ薬の広告の見出しを切り抜いて，最初の紙片に貼りつけているのは，自嘲の仕草であるにせよ，結局は (想像裡の観客を意識した) 愛すべきシャレになっている。

ダフィー氏は，都市の郊外生活者の矛盾 ("he wished to live as far as possible from the city of which he was a citizen." という文自体が矛盾絡み) を備えている。彼は，都市にありながら，都市の喧騒を離れた郊外に住むことを望み，そして，自分と同じ種族の他の郊外生活者を，"mean", "pretentious", "modern" と見下している。また都心の喧騒を厭いながらも，Rotunda や Earlsfort Terrace でのコンサートには時々出かけ，都市文化の果実はちゃっかりと齧っている。"His evenings were spent either before his landlady's piano or roaming about the outskirts of the city." というのも，"roaming about" というのが，静かな散策というのとは少し趣を異にしており，彼が，都市という劇場の見せ物をこっそり享楽している可能性を匂わせている。(そうでなければ，アル中患者たちの生態は見ることができないであろう。)

自己矛盾は，彼が心の底に秘めていたらしき過去の社会主義運動への参加にも見られる。社会主義は，貧しい人々への強い共感，驕った富者への敵意を根本動機にしなければなるまいが，乞食，アル中患者，パブの労働者たちへのダフィー氏の態度を観察すると，無関心や侮蔑が看取できる。そもそも，彼ほど連帯意識に乏しい人間もいないというもので，それでは社会主義になりようもない。彼自身は銀行に勤務し，黒ビールではなく "lager" を飲み，ワーズワースを愛し，ニーチェを読む。モーツアルトを好み，コンサートに行く，というような典型的なブルジョワ趣味を有している。都市生活を享受しながら，都市を嫌って見せるのと同じように，中産階級の生活に安んじながら，社会革命に共感を示して見せている。("He felt that they were hard-featured realists and that they resented an exactitude which was the product of a leisure not within their reach." の文でも論理的な矛盾が内包されている。) 彼は，いざとなれば銀行の金を奪うこともやりかねないと言っているのは，おそらく彼なりの社会革命のビジョンと繋がっているのかもしれないが，それは観念上の装飾にすぎず，決し

てそういう瞬間は来ないだろうことを読者は確信する。

さて，こうした自己矛盾は，シニコウ夫人との関係においても執拗に現われてくる。ダフィー氏は飽くまで「友情」というレベルで彼女との関係を考えているが——

The eyes were very dark blue and steady. Their gaze began with a defiant note but was confused by what seemed a deliberate swoon of the pupil into the iris, revealing for an instant a temperament of great sensibility. The pupil reasserted itself quickly, this half-disclosed nature fell again under the reign of prudence, and her astrakhan jacket, moulding a bosom of a certain fullness, struck the note of defiance more definitely.

というところでは，彼女の性的な魅力に目ざとく着目している。そして——

Little by little he entangled his thoughts with hers. He lent her books, provided her with ideas, shared his intellectual life with her. She listened to all.

というふうに，知性的な交わりを，性的な交わりの代替物として機能させ始め，果たせるかな——

Sometimes in return for his theories she gave out some fact of her own life. With almost maternal solicitude she urged him to let his nature open to the full : she became his confessor.

と，シニコウ夫人はそれに応え，霊的な交わりで彼に報いてくる。そして，ダブリン郊外の彼女の家の中，暗くなってゆく部屋に二人きりでいる時——

Little by little as their thoughts entangled they spoke of subjects less remote. Her companionship was like a warm soil about an exotic.

と，その親密の度は，単なる友情の域を越え，もう後戻りできないようなところまでゆく。流れから行けば，これで本格的な恋愛に深まるべきところであるが，ここに至ってダフィー氏は，彼女に向かい，“soul's incurable loneliness” という，今現在二人が行っていることとは全く矛盾する，人と人とは結局交わることはできないということを説き始めるのである。逆説的にもそれがシニコウ夫人を昂ぶらせ，彼女はダフィー氏の手を取って，自分の頬に押しつける。そしてそのことがダフィー氏を幻滅させ(と，彼自身は述懐する)，1週間の冷却期間を置いた後，手紙を出して夫人と会い，別れ話を持ち出す。別れるのであれば，最初から手紙にそう書けばすみそうなものだが，3時間も一緒に公園の中を歩き，“[E]very bond... is a bond to sorrow.” というようなことを彼女に語りかけるのであ

る。そして，沈黙の中，(彼女が乗るべき)電車に向かって歩いていると，彼女は激しく震え始め，それが危険な徴候だと察知したダフィー氏は，そそくさと別れを告げて足速に歩み去るのである。

シニコウ夫人を親密な領域にまで引き寄せておいて，彼女がそれに感応すると，それを突き放し，女性が熱情的な反応を見せたところで，永遠の別れを告げるダフィー氏の所業は，読者から見ると，一貫性のない裏切り行為に見える。いやそれ以上に，夫人がどのような気持でいるか，どのような反応をするかを潜在意識下で予見した上で行動している節もあり，そうなると，ほとんんど加虐的，犯罪的ですらある。(彼は自分の行っていることが，*Michael Kramer* の筋書きに沿ったものになっていることに気づかなかったとすれば，それは彼の意識の最大のポカと言うべきであろう。)トリスタンは，イゾルデに対し，不義ではあるが，その宿命的な情熱に殉じる男らしさを有していた。それに対し，現代の「麻痺」したトリスタンは，情熱が自意識に堰かれ，奇妙な倒錯性と不能さに囚われている。その意味では，ダフィー氏の部屋の窓から見える，がらんとした醸造所は，その巧みな表象として機能しているように思われる。

別れてからのダフィー氏を見ると，夫人とつきあっていたときよりむしろ幸福そうに見える。別れの2ヶ月後に幾つか文をしたためているのが，さすがに心にさざ波が立ったことを示唆しているけれども，それきりであって，「*Bile Beans* の紙束」に4年間ほとんど書き込みがされていないということは，彼の精神のこの上ない安定を物語っている。楽譜も書籍もそれほど増えてはおらず，彼の生活は，精神生活を含めて，同じことの反復の中で営まれていたのである。彼の幸福を保証してくれていたものは何なのであろうか？それは読者がかなりの確度で推測できるように，シニコウ夫人が今もって彼のことを想いつつ淋しく日々を送っているであろうという想像であるはずだ。最初に夫人に会ったとき，ダフィー氏は，「彼女を永遠に記憶に留めようと」しているが，それは，その場面を将来の追憶の糧として保存し，折に触れそこから滋味を摂取しようとする魂胆からにほかならない。とすれば，彼の自意識にとって，シニコウ夫人との濃密なエピソードは，4年の歳月をかけてもなお味わい尽せぬほど，彼の記憶の《倉》を充たしたことであろう。

寒い秋の日に別れてからちょうど4年が過ぎた11月のとある夕方，ダフィー氏は，夕刊でシニコウ夫人の死を知るわけだが，この晩秋の季節が，4年前は二人の関係の終りを，今はシニコウ夫人の死を迎えるのにふさわしい雰囲気を添えている。ダフィー氏が口に運ぼうとして皿に戻したキャベツに包まれたコーンビーフは，冷えて白い脂肪を凝固させ，外に出た彼が乱れがちに吐く息も，冷たさで白く凝結する季節である。

ダフィー氏同様，読者も，新聞記事を何度も読んで，事故[5] の顚末を推理しなければならない。新聞記事の言わんとするところを時系列的に整理すると，キングズタウン発の上り鈍行列車の運転手ジェイムズ・レノンは，シドニー・パレイド駅で停車し，午後10時に，安全確認の係が笛を吹いた後，列車を発車させた。列車が動き出そうとしたとき，ポーターのP.ダンは，一人の婦人が，線路を横切ろうとしているのを発見，彼女の方へ走りながら呼びかけるが間に合わず，婦人は排障器に撥ねられて倒れる。人々の叫び声が上がり，レノンはそれを聞いて，列車を止める。発車から1，2秒後のこ

とである。

警察の巡査部長クローリーが現場に駆けつけたときは,彼女はプラットホームに横たえられており,すでに絶命しているように見えたが,救急車が到着するまで,駅の待合室に彼女を運んだ。やがて救急車が到着し,彼女はダブリン市立病院に運ばれ,副外科医をしているハルピン医師が担当した。翌日検死が行われ,検死官のレヴェット氏不在のため,検死官代理が検死を行った。

ハルピン医師と検死官代理の二人の所見を総合すると,シニコウ夫人の遺体には,右肋骨の下2本の骨折,右肩の重い打撲傷,および右側頭部の傷が認められたということになる。排障器が食い込んだのが右の肋骨で,倒れたとき,右肩を強打し,続いて右側頭部を打ち,そのショックで心停止に陥り絶命したと考えられている。(しかし,右体側に排障器が当たったとすると,右肩,右側頭部を地面で打つには,体が180度回転しなければならず,少し不自然ではなかろうか。[6] "A juror—You saw the lady fall? /Witness—Yes." の証言も,何となく所を得ず,含みのありそうな問答になっている。)

シニコウ夫人が2年ほど前から酒浸りになり,夜遅く酒を買いに出かけるようになったという夫と娘の供述,そして,シニコウ夫人が線路の横断に歩道橋を使わずプラットフォームからプラットフォームへと常習的に渡っていたという,鉄道会社のフィンレイ氏の証言をうけて,新聞記事が読者に説得しようとしているのは,泥酔したシニコウ夫人が,発車した列車の直前を横断し,撥ねられてしまったということのようだ。

(北西に向かう)上り列車が右体側に当たったということは,シニコウ夫人は東へ,つまり自宅のほうへ向かっていたということになる。"the deceased lady, while attempting to cross the line" の部分は,草稿段階では,"the deceased lady travelled from Westland Row" [7] となっているから,彼女は夜市街地へ出て酒を飲み,泥酔して下り列車でシドニー・パレイド駅に着き,プラットフォームを横断しようとして,発車したばかりの上り列車に撥ねられたという筋書きになろう。しかしそれを信じるためには,下り列車と上り列車が,ほぼ同じ時刻に駅に停まり,下り列車の後部から降りたシニコウ夫人が,プラットフォームを降り,停車していた上り列車の直前を横切り反対側のプラットフォームへ上がろうとしたのだと想定する他はないが,列車があまり頻繁に行き来する路線でもないので無理の多い想定となる。では,草稿とは違って,自宅近くの酒場に行った帰りという設定に変えられているすればどうであろう?しかし,このあたりは郊外地なので,酒場自体が,あっても限られており,そんなところへ出入りすればたちまち近所の噂の種となるので,やはり不自然な想定となる。アル中の人間が酒を求めるのは,どうしても,無名性が確保できる市街地になるだろう。(Westland Row はこの線の terminal である。)

結局,いろいろなことを考え合わせると,事故というよりは,自殺であったと考えるほうが辻褄が合う。発車したばかりの列車に倒れ込むように身を投げ,肋骨,肩,頭部を排障器に強打され絶命した。自殺ということでは外聞が悪いので,関係者が協力し「事故」として穏便に処理したのであろう。少なくともダフィー氏は,"the cautious words of a reporter won over to conceal the details of a commonplace vulgar death" と,新聞記事を額面通りには受け取っておらず,背後に隠されたものを

嗅ぎ取っている。さらに，ダフィー氏が翻訳までしているハウプトマンの *Michael Kramer* が，謹厳すぎる父親を持つ息子が自殺してしまう筋書きの悲劇であれば，ジョイスが，自殺の可能性を含ませて書いていることは明らかだと思われる。

とまれ，シニコウ夫人の生活はこの2年間，それほど苦しいものであったに違いない。夫のシニコウ船長は，"They had been married for twenty-two years and had lived happily until about two years ago" と言ってはいるものの，ダフィー氏が夫人に会ったときはすでにシニコウ船長は夫人を "his gallery of pleasures" からきれいさっぱり追放していたのだから，彼女が酒に溺れ始めた2年前からはいっそう冷えきった関係になっていったに違いない。4年前は，一緒にコンサートに来るなど，母娘の関係は悪くもなかったのであろうが，夫人が死んだ夜，娘のメアリーは11時に帰宅しているところからして，ずっと距離ができており，最近では，夫人が夜を一人きりで過ごすことが多くなっていたのではないかと推測されるのである。

ダフィー氏の精神的安定は，シニコウ夫人が孤独の中で彼のことを想ってくれているはずだという意識に支えられていたに違いないとすれば，現実は，彼の予想をはるかに超えて実現したのである。しかし物語は，ここからさらにドラマの密度を高めていく。

「結」の部分のダフィー氏の行動と心理の変遷を，テクストに沿って diagram 化してみると，次のようになる。《　》にはダフィー氏の心理・気分を表す便宜的な言葉を記しておいた。

(1) 夕食を食べている最中に新聞記事でシニコウ夫人の死を知る《衝撃》。
(2) 店を出て家に帰るときの様子《動揺》。自分の部屋でもう一度新聞記事を読む。《吐き気》。
(3) 過去に自分が取った選択を是認する《自己正当化》。
(4) 夫人の手が彼に触れるように感じる《神経的不安》。いたたまれなくなり，外へ出，酒場に入る《逃避》。
(5) （酒場の中）夫人が死んだということが認識され《現実感覚の回復》，夫人の生活を思いやり《憐憫》，自分の生涯の淋しさをありありと感じる《自己憐憫》。
(6) 酒場を出て公園に入る。夫人が身近にいるように思われる。なぜ彼女を死に至らしめたのかという問いに，自分の信じていたモラルの土台を打ち砕かれる《自己懐疑，自己否認》。
(7) Magazine Hill に上り，暗がりで愛を取り交わしている男女の群れを見，自分が人生の饗宴から疎外されているのを感じる《疎外感，絶望感》。列車の音が，彼女の名前を呟いているように思える《怖れ》。
(8) 今来た道を戻りながら，列車の音が耳の中で鳴りやまないので，一本の樹の下で，その音が消えるまで待つ。音が消える《寂寞》。

このように，「痛ましい事故」の「結」の部分は，ダフィー氏の心理が目まぐるしいほどに高速度で展開しているのだが，それが舌足らずの叙述に終っておらず，読者に十分説得的に伝わってくるということは，ジョイスの瞠目すべき文学的技量を証して余りある。

ダフィー氏の住んでいるところのトポグラフィーは，Bruce Bidwell & Linda Heffer, *The Joycean*

Way : A Topographic Guide to 'Dubliners' & 'A Portrait of the Artist as a Young Man' (Wolfhound Press, 1981) の Map 7. 3. 8 に，1900年当時の Chapelizod の簡略な地図があり，これに基づいて彼の歩いた道を辿ると，Lucan Road に面して立っている彼の下宿(彼の部屋から，Liffey 川を隔てて，左手のほうに Phoenix Park Distillery——当時の名は，Dublin and Chapelizod Distillery——が見える）を出て，東に少し行くと交差点に出る。左手に Chapelizod Bridge という橋がかかっていて，この橋で Liffey 川を渡ると，Chapelizod Road という，Phoenix Park の南の端に沿って走る道路に出るわけであるが，渡る手前の南東の角に Bridge Inn というパブがある。それがダフィー氏が入ってホットパンチを飲んだ店であろう。店で聞こえる路面電車の音は，Lucan Village とダブリン市内を結んで Lucan Road を走る電車のもので，毎朝，ダフィー氏はこの電車で通勤しているわけである。(この tram line がダブリン最古のもので，1872年 2 月 1 日に開業し，1900年 2 月27日に電化されている。[8] Liffey 川沿いに走るわけであるから，かつての水運から陸上運輸への移り変わりを見てきた土地である。ダフィー氏は，なるべく市内から遠くに住むべくこの地を選んだ，と言っているが，交通の便から言えば，便利で文明的な location と言えよう。)

店を出て橋を渡り，Chapelizod Road を右にしばらく行くと Chapelizod Gate という門があり（別れの日には，そこよりさらに3.5kmほど東の公園の東端の Park Gate の近くのケーキショップで落ち合い，Park Gate から公園に入ったと思われる)，Don Gifford はダフィー氏はここから園内に入ったと考えているが，公園の中に入ってからかなりの距離を歩いているような叙述から見て，それよりは手前の門から入ったのであろう。その公園の小徑を東の方にしばらく行くと，Magazine Hill と呼ばれる小高い丘に着く。ダフィー氏はここまで来て，しばらく佇んだ後，同じ道を下宿の方に戻っていくのである。

さて，上の diagram の（1）ではダフィー氏が強い衝撃を受けたことが描かれ，新聞記事に対する読者の関心をいやが上にも高めるのであるが，実際に新聞記事を読んだ読者は，ダフィー氏の衝撃は理解するものの，(2) に述べられるダフィー氏の反応には，予想を裏切られるのではあるまいか。彼は悲しみや悼みではなく，revulsion を感じている。それは，酒浸りになったり，あるいは自殺したりすることに対する道義的な拒絶反応である。従って，この強い revulsion は，ダフィー氏が，それだけシニコウ夫人を自分の "soul's companion" と見なして来たということを，逆に読者に epiphanic に開示しもするのである。夫人の方が，魂だけの交流に堪え得ないがゆえに，もう会うまいと決めたのであるが，そうした別離の緊張を，彼はむしろ霊的交流にふさわしいものとして歓迎し，それが彼の精神的安定を支えていてくれるのであるから，おそらくシニコウ夫人も，自分に想いを馳せながら，淋しさに堪えつつも，彼の思い出を反芻することによって，霊的幸福を維持してくれているのではないか——ざっとそんなふうに彼は期待しながらこの 4 年間を送ったらしいことが，(虫のいい思い込みではあり，実際のダフィー氏は，もっと違った快味を潜在意識下で味わっていたとしても，少なくとも彼の意識の上ではそう思っていたらしいということが）この意想外の revulsion という反応によって読者に明かされるのである。しかし現実の彼女は，人生の敗残者である，あのおぞましい群れに身を

投じてしまった！彼女自身の品格も台なしなら，彼女と最も大切なものを分かち合ったこの自分の心にも泥を塗ってくれたではないか！シニコウ夫人はそんな女であったのか，なぜ自分はそんな女に騙されてしまったのか，それなら，あの時別れたことは何と正しい選択であったことか――そのようにダフィー氏は考えるのであるが，それは，彼女を死に追いやったのが他ならぬ自分であることを直視したくないがための，本能的な自己防衛とも見えてくる。

しかし，しだいに暗くなり始め，いろいろな思い出がさ迷い始めると，頭で考えることや生理的な反応のステージから，神経が冒され始めるステージへと移行し，彼はいたたまれなさに耐えきれず，外へ出ていく。

The shock which had first attacked his stomach was now attacking his nerves. He put on his overcoat and hat quickly and went out. The cold air met him on the threshold: it crept into the sleeves of his coat. When he came to the public-house at Chapelizod Bridge he went in and ordered a hot punch.

戸口のところで冷気が彼を迎え彼の服の内側に忍び込んでくる描写は，恰もシニコウ夫人の亡霊が彼に取り憑くような描き方になっている。彼女の最期の姿は，無惨なものだっただろう――乱れた髪，乱れた服，そして青ざめてむくんだ生気のない表情と，ぼんやりとした光を失った濃青色の目，そして，血まみれの歪んだ骸。ほんの少し歩いただけで，ダフィー氏は，おそらくこれまで一度も入ったことのない，どちらかと言えば場違いな酒場に入るが，それはそうでもしなければ堪えられないほどのゾクゾクするような寒気を感じていたためである。彼はそこで少し落ち着きを取り戻し，ホットパンチで身体を暖めながら，シニコウ夫人と過ごした過去を振り返る。

そして，かつて知っていた彼女の姿と，死ぬ直前にそうであっただろうと思われる彼女の姿を交互に呼び出しているうちに，彼女は《死んだ》ということが，ようやく腹に入ってくるようになる。もうこの世に存在しないのだ。

「魂の伴侶」がもぎ取られれば，それとともに，いつかは訪れる自分の死も，そしてそれを待つ間の淋しさも，水の中で瓶の栓が抜かれたように，意識の中に流れ込んでくるようになる。それは彼女が味わったに違いない淋しさである。これまでは，現実と彼の間に，生きているシニコウ夫人が自分のことを想ってくれているという illusion の防壁があって，それによって彼は現実の冷酷さから守られていたのであるが，今や illusion のヴェールは剝ぎ取られ，労働者たちの吐き散らす唾とおが屑と店主の欠伸という現実の寒々しさが，初めてのように彼を襲う。

彼は9時を過ぎてから店を出て，公園の中に入り，4年前に彼女と一緒に歩いた徑を歩いた。暗がりの中にいると，彼女の声が耳に触れ，彼女の手が彼の手に触れるような感じがした。

The night was cold and gloomy. He entered the Park by the first gate and walked along under the gaunt trees. He walked through the bleak alleys where they had walked four years before. She seemed

to be near him in the darkness. At moments he seemed to feel her voice touch his ear, her hand touch his. He stood still to listen. Why had he withheld life from her? Why had he sentenced her to death? He felt his moral nature falling to pieces.

最後の "Why had he withheld life from her? Why had he sentenced her to death?" は，言うまでもなく，神経の中に入り込んだ死んだシニコウ夫人の亡霊が問いかけているのだ。そしてその問いが，排障器が彼女の肋骨を砕いたように，彼のこれまで正しいと思っていたモラルの土台を打ち砕くのである。

彼は Magazine Hill の頂きに登る。その下の暗がりでは，生々しい愛欲の絵図が繰り広げられており，彼には味わうことのできない人生の本物の蜜が吸われている。いや，彼とても，もし勇気さえ出していれば，彼を愛してくれるこの世でたった一人の女性を得ることができたのである。それをあろうことか，お前は彼女の生を拒絶し，酷い判決を下し，汚辱の死を与えてしまった。お前はもう人生の饗宴に加わることはできないし，誰もおまえが居ることを望まない——ダフィー氏は，彼がシニコウ夫人に別れを告げた同じ場所で，人生から別れを告げられるのである。

He turned his eyes to the grey gleaming river, winding along towards Dublin. Beyond the river he saw a goods train winding out of Kingsbridge Station, like a worm with a fiery head winding through the darkness, obstinately and laboriously. It passed slowly out of sight, but still he heard in his ears the laborious drone of the engine reiterating the syllables of her name.

この列車は，Kingsbridge Station から Cork に向かう，Great Southern and Western Railroad の貨物列車である。いわくありげな，そして奇妙に心に残るこの描写は何を意味しているのだろうか？この作品の中では「ダブリンの基」である Liffey 川が 4 度登場するが，最初の 2 箇所は，"He lived in an old sombre house and from his windows he could look into the disused distillery or upwards along the shallow river on which Dublin is built." および "The river lay quiet beside the empty distillery...." と，空虚な醸造所の脇で，ほとんど動きを感じさせない不活性の川として描かれている。それがこの Magazine Hill からの眺望においては，上の引用部の描写のように，Liffey 川は突然生気を帯び，月明かりに輝きながらうねり流れるその姿を現している。そして川の流れゆく先には，ダブリンの灯が赤く暖かく燃えている（"the lights of which[Dublin]burned redly and hospitably in the cold night."）——そのイメージと，貨物列車の "like a worm with a fiery head" というイメージには，相似性が意図されているようだ。ダフィー氏の目に，初めて，世界の蠱惑的な姿が，性的な potency を輝かせながら現われているのである。そして列車は，E-mi-ly Si-ni-co, E-mi-ly Si-ni-co と，夫人の名のシラブルを呪文のように囁きながら，闇を裂くように進んでいく。

しかしダフィー氏は，この丘から追放されねばならない。彼には生の甘美さを享受する資格がない

のだ。“rectitude” に呪縛されて一生を送る運命なのである。彼は丘を後にし，再び闇の中へ，来た徑を引き返し始める。シニコウ夫人の暗い部屋の中で，甘美な音楽が二人の耳の中で余韻を響かせ，二人を結びつけてくれたように，今，姿は消えてしまったが，列車はそのリズミカルな音の余韻を，彼の耳に囁き続けた。しかし樹の下に立ち止まり，しばらく待っていると，その音もやがて遠ざかり，静寂の中に消えていってしまった。彼は再び耳を澄ませたが，もう何も聞こえなかった。彼は本当の一人きりになってしまったのである。

*　　*　　*　　*　　*

“He could hear nothing: the night was perfectly silent. He listened again: perfectly silent. He felt that he was alone.” という結びの文は，シニコウ夫人が死んで初めて，痛切な孤独が感じられるようになったことを表現していると解釈できるだろう。しかし，その裏では，重層的な解釈の余地も残しておかなければならない。もう一度最後のところに目を凝らしてみよう。

He turned back the way he had come, the rhythm of the engine pounding in his ears. He began to doubt the reality of what memory told him. He halted under a tree and allowed the rhythm to die away. He could not feel her near him in the darkness nor her voice touch his ear. He waited for some minutes listening. He could hear nothing: the night was perfectly silent. He listened again: perfectly silent. He felt that he was alone.

来た小徑を引き返しながら，ダフィー氏は耳の中に残る機関車の音に悩まされる。そして “memory”（＝シニコウ夫人の亡霊）が，彼に語りかけてきたことの “reality” をすら疑い始める。本当にそんなことがあったのだろうか？ありもしないことに誑かされていただけの話ではないか。お前は，前と同じお前でいればいいのではないか。そして彼は，“He halted under a tree and allowed the rhythm to die away.” と，耳の中の音が出ていくのを待つ。もう彼女の存在も，声も感じられなくなっている。機関車の音だけだ。彼はしばらく待って耳を澄ませてみる。何も聞こえない。幻聴は去ったようだ。それでも，彼は周到に，もう一度耳を澄ませてみる。やはり何も聞こえない。彼は，彼の本来の element である，自分だけの世界に戻れたのである。

その視点から読み直してみると，この夕方以降ダフィー氏が行ってきたことは，シニコウ夫人の思い出という亡霊を追い払うための儀式として解釈できよう。生身のシニコウ夫人のときは，ケーキショップで待ちあわせ，公園を3時間もかけて歩きながら，彼は周到に，彼女を自分から切り離した。二度とよりが戻らぬよう，時間をかけて彼女を説得した。ちょうどそのように，ダフィー氏は，橋のたもとの酒場で彼女の思い出を呼び込み，彼女の思い出の声に耳を傾け，気があるようなそぶり，説得されるようなそぶりを見せながら，思い出と絡み合っていく。そして Magazine Hill において，彼は自分の罪を告白し，人生の饗宴からの永劫の追放という刑を甘んじて受ける。それは霊への贖罪に

見えて，実は縁を切るための口実になっている。私は罰せられ，孤独地獄で生きる他はない。だからもう霊が彼のところに来る必要はないのではないか。彼は踵を返すと，自分の家に向かう。霊が，追いすがり震えながら何か呟く。また会うことはできないか，と。彼は沈黙を守り横を向く。亡霊は淋しげに彼を去っていく。

ダフィー氏はこのように，シニコウ夫人を三度殺すのである。一度目は，彼女の柔らかな感情を拒むことによって，二度目は，苦しむ彼女を見捨て，酒に溺れさせ，肉体の死に至らしめることによって，そして三度目は，彼女の思い出を忘却の淵に沈めることによってである。いずれも，一度は体内に取り込み，必要とするものを吸収してしまうと，さっさと体外に滓を排泄する原初的な生物のように，無慈悲に，機械的に処理している。ダフィー氏は，自分というものの壁を取り崩し，他者と本当に交わることのできない，都市生活者という，孤独の「麻痺」の重症患者なのだ。

*　　*　　*　　*　　*

だがわれわれ読者も，もう一度，最後の部分に周到に耳を澄ませてみるのが賢明かもしれない。ダフィー氏は，シニコウ夫人に出会う前は，可能性としての（4脚の籐椅子！）夫人のような女性と，シニコウ夫人とつき合っているときは，生身のシニコウ夫人と，シニコウ夫人と別れた後は，彼をいつまでも慕ってくれているであろう想像裡のシニコウ夫人と，そして死んだ後は——ほんの短い間のことではあったが——その思い出と，彼の自分に引き籠もった世界の中で，communion を取り交わすことができた。しかし今や，死者の思い出すら葬り去ってしまうと，同じ脚本はもう使えないであろうがゆえに，もはや自分自身とも communion を交わすことができなくなってしまうのではないか。つまりこれまでダフィー氏を支えてきた生物的詐術は，さほどうまく機能しなくなるのではないかと懸念されるのである。

とすれば，ここでダフィー氏は，シニコウ夫人と同じ，人生の本当の淋しさを知ることになるとも言えるのである。そうなると，ここで再び読者の心は，ちょうど死によって，トリスタンとイゾルデが永遠の愛に結びつけられたように，その同じ深い孤独によって，ダフィー氏とシニコウ夫人に，聖別を受けた永遠の恋人としての墓碑銘を——20世紀初頭のダブリンに生れ落ち，都会の「麻痺」に生贄のように搦め取られ，違う星のもとに生を享けていれば，ひょっとしたら美しく咲いていたかもしれぬ恋を，なす術もなく自ら屠ってしまった哀れな恋人たちに献じる墓碑銘を——刻んでやりたくなるような，そんな惻々とした気持に，半ば誘われるのではないだろうか。

——注——

(1) テキストには，*Dubliners,* Viking Press, 1961 を用いた。

(2) "I wish someone was here to talk to me about Dublin. I forgot half the things I wanted to do. The two worst stories are *After the Race* and *A Painful Case.*" Richard Ellmann (ed.) *James Joyce Letters* Vol. II (The Viking Press, 1966), p.189.

(3) 米本義孝 『言葉の芸術家ジェイムズ・ジョイス 「ダブリンの人びと」研究』(南雲堂，2003) p.263-4.

(4) 原文では，「起」"Mr James Duffy lived in Chapelizod..." ～ "... an adventureless tale." ;「承」"One evening he found himself sitting beside two ladies..." ～ "A few days later he received a parcel containing his books and music." ;「転」"Four years passed." ～ "No blame attached to anyone." ;「結」"Mr Duffy raised his eyes from the paper..." ～ "He felt that he was alone." となる。

(5) 現実に Sydney Parade 駅ではこうした事故の記録はないとする批評もあるが，John Wyse Jackson and Bernard McGinly, *James Joyce's* Dubliners *; An Illustrated Edition with Annotations,* Sinclair-Stevenson, 1993, p.100 には，1904年7月の *Illustrated Irish Weekly and Nation* の "Sydney Parade Fatality" という記事が転載されている。また，Richard Ellmann は，そのことには言及していないが，後のスタニスラウスの興味深い証言を記録している。See Richard Ellmann, *James Joyce,* New and Revised Edition (Oxford University Press, 1982), p.210 note.

(6) 第1稿では，"sustaining severe injuries of the head and the *left* side [Italics mine]" となっていて，ジョイスがこのことについてかなり考えを凝らしたことを窺わせる。See Robert Scholes and A. Walton Litz (eds.) *Dubliners : Text, Criticism, and Notes* (Penguin Books, 1996), p.230.

(7) 同上

(8) On the 27th February 1900 the new electric system was inspected and passed by officers of the Board of Trade. Newspaper advertisements appeared announcing that the opening of the line would take place on the 8th March. Cars were to run at 45-minute intervals from 8 a.m. to 10.15 p.m. daily. (Source : http://www.askaboutireland.ie/show_narrative_page.do?page_id = 280)